

埋立記念館の説明（小学生向け）

2021年11月14日作成

2022年3月24日更新

1 富津埋立記念館について

- ・富津埋立記念館は、平成5年（1993）年に開館しました。
- ・海岸を埋立する時に、漁業をやめた人たちが使っていた道具を展示するために作られた資料館です。
- ・おもな展示品は、海苔作りの道具、海にもぐって貝を取る潜水漁のための道具、そのほか、漁業に使う網や大漁旗などの道具です。

2 富津の海苔づくり

- ・富津で海苔作りが始まったのは、今から200年前の1821年（文政4年）です。
- ・最初のころは木の枝や竹を海の中に立て、そこで海苔の胞子を育てて収穫していました。
- ・昭和の初めごろになると網に海苔を付着させて収穫するようになりました。
- ・昭和の後半になって、海に広く海苔網を張り、船を網の下にもぐらせて収穫する「ベタ流し」という方法が採用され、現在に至っています。
- ・昭和40年前後までは、伝馬船という船に乗って、手作業で海苔を収穫していました。海苔を四角い枠に入れて延ばす作業も、よしずの上で干す作業も手作業で行っていましたが、現在では機械化されています。

3 富津の潜水漁業

- ・潜水服を着て海にもぐり、貝を取る潜水漁業が富津で始まったのは明治時代です。
- ・最初のころは、海岸の近くの比較的浅いところで、平貝やミル貝を取っていました。
- ・昭和の中ごろになると、海岸の近くでは平貝があまり取れなくなり、沖の深いところまで取りに行くようになりました。
- ・平貝が取れなくなると、取る貝の種類も赤貝やトリ貝に変わっていきました。
- ・最近では主に白ミル貝やナマコなどを取っています。
- ・最初のころは、船の上から潜水士へ手押しのポンプ（展示してあるもので空気を送っていましたが、昭和に入ってから、コンプレッサーなどの機械を使って空気を送るようになりました。
- ・船の上と潜水士との交信は、最初のころは命綱による合図で行われていましたが、昭和40年頃から電話器による通信に変わりました。